



ACT 1

大丸有SDGs ACT5

アクションレポート 2023



ACT 2



ACT 3



ACT 4



ACT 5

CONTENTS

ご挨拶	02
概要	03
今年度サマリー	04
E&Jフェスインタビュー	06

ACT5アクション事例

ACT1 サステナブルフード	07
ACT2 環境	09
ACT3 ひとと社会のWELL	11
ACT4 ダイバーシティ& インクルージョン	13
ACT5 コミュニケーション	15
ACT5メンバーポイントアプリ	17
メディア掲載一覧	20
有識者からのコメント	21
参加者からの声	22
総括と次年度に向けて	24
アクション一覧/写真	25

ご挨拶

国内外の潮流、そして足元の変化を捉えながら、2030年のSDGs達成に向けて、大丸有エリアを起点に課題解決へのアクションを続けます



大丸有SDGs ACT5 実行委員長

長沼 文六

三菱地所株式会社
代表執行役 執行役専務

2023年、気候変動問題においては、夏の世界の平均気温が観測史上最高を記録し、「地球沸騰化」時代に入ったとも評される一方、年末の国連の気候変動枠組条約締結国会議(COP28)の採択文書において、「2050年までに温室効果ガスの排出量ゼロを達成するために、化石燃料からの脱却を加速させる」と明記され、対策を加速させていく道筋も見えました。

ジェンダー平等の課題においては、我が国は世界経済フォーラムによる「ジェンダーギャップ指数」において世界125位と過去最低となり、特に政治・経済面での格差が埋まっていない課題も示されています。

さらに世界に目を向けると、大規模な紛争が勃発・継続し、人権はおろか多くの人命の危機が顕在化している状況です。これに象徴される世界情勢の不透明化は、SDGsの意義そのものが問われているともいえるでしょう。

世界規模の社会のうねりはすぐには制御し得ないものではありますが、人類共通の目標であるSDGsの達成に向けて、このような時代だからこそ、公的セクター、民間、個人等による認識のさらなる高まりが必要であり、各主体のより積極的な取り組みが求められると思われま。

2020年に開始した大丸有SDGs ACT5は、今年で活動4年目となりました。今年は、エリア内外の企業、団体のパートナー、そして個人参加者の増加により、そのアクションを定着、浸透、拡充することが出来た一年となりました。

一人ひとりが行動を変えることで社会の仕組みが変わり、それが地球規模の大きな目標達成にも繋がっていくと信じて、次年度以降も、大丸有エリアを起点に個人、団体、企業のパートナーシップで課題解決へのアクションを起こしていくこの活動を、一層促進していきたいと考えています。

大丸有エリアを起点とし、“食や地域”を切り口に、パートナーシップで社会問題を解決していきます



大丸有SDGs ACT5 副委員長

梅田 泰弘

農林中央金庫 常務執行役員

政府が昨年公表したSDGs実施指針改定版によると、SDGsに対する国民の認知度は約9割に達し、「持続可能性の理念は、日本がより良い持続可能な発展と繁栄を実現していく上での確固たる原動力となりつつある」とされており、世間におけるSDGsの認知度とその重要性がより一層高まってきたと感じる年でした。

また、昨夏は記録的な猛暑が各地で農作物の収量減等を引き起こしており、「農林水産業と食と地域の暮らしを支えるリーディングバンク」を掲げる当金庫としても、気候変動の影響について改めて考えさせられる年でもありました。

当金庫は「投融资先等のGHG排出量削減2050年ネットゼロ」を中長期目標の1つに定めておりますが、社会課題の解決は1社の取り組みで到底解決できるものではなく、皆さまとのパートナーシップの力で解決を目指すことが求められると考えています。

私たちはこの大丸有SDGs ACT5を、社会課題を解決していくパートナーシップのプラットフォームと捉え、引き続き、多様な

業種のパートナー企業と連携しながら、2030年のSDGs達成に向けた多様なアクションを展開してまいります。

大丸有SDGs ACT5の4年目の活動では、食のサステナビリティを考えるイベント「SUSTABLE」において、循環型農業やプラントベースドフード等について学び・体験する機会を提供したほか、農業とSDGsの関係にフォーカスしたセミナー・体験企画、また農福連携のPRといったダイバーシティ&インクルージョンの推進に繋がるイベント等、多岐にわたるアクションをパートナー企業とともに展開することができました。

食や農林水産業の各分野で社会課題の解決に向け、熱い思いをもって行動されている企業・生産者の取り組みや、地域のサステナビリティを目指す取り組みを、大丸有エリアから発信し、人々の関心に働きかけることで、社会全体の課題解決に繋げていきたいと考えています。

実行委員会 役職等は2024年2月時点

実行委員長

長沼 文六

三菱地所株式会社 代表執行役 執行役専務

副委員長

梅田 泰弘

農林中央金庫 常務執行役員

平田 喜裕

株式会社日本経済新聞社 取締役副社長

委員(順不同)

村木 美貴

千葉大学大学院 工学研究院 教授

為井 清文

農林中央金庫 食農法人営業本部 営業第二部長

酒井 耕一

株式会社日経BP 日経ESG 発行人

菊川 嘉彦

丸の内熱供給株式会社 専務執行役員

狩野 洋平

大手町・丸の内・有楽町地区まちづくり協議会
都市機能部会長

堀 健一

株式会社三菱総合研究所
地域・コミュニティ事業本部 副本部長/地域DX事業部長

竹内 和也

大丸有環境共生型まちづくり推進協会 専務理事

服部 謙一

三菱地所株式会社 エリアマネジメント企画部長

大谷 典之

大丸有エリアマネジメント協会 事務局長

歌川 貴

株式会社東京国際フォーラム 取締役
(大丸有地域連携担当、営業担当補佐)

監事

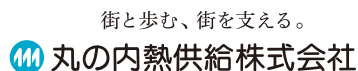
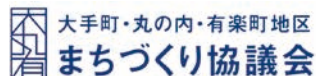
吾田 鉄司

三菱地所株式会社 サステナビリティ推進部長



概要

○ 大丸有SDGs ACT5実行委員会



大丸有SDGs ACT5 とは

東京駅前、大手町・丸の内・有楽町地区（以下、「大丸有エリア」）を起点として、大丸有エリア内外の企業・団体が連携し、SDGs達成に向けた活動を推進するプロジェクトとして、2020年に始動しました。



総合デベロッパーである三菱地所、地域の一次生産者を支える金融機関である農林中央金庫、日本を代表する経済メディアである日本経済新聞社ら複数の企業、団体が実行委員会を組成し、お互いの持つ様々なリソースを持ち寄り、具体的なアクションの創出を目指しています。

○ 特徴



1 コミュニティの形成

大丸有エリア内外の企業・団体が個社の枠を超えて協業し、大丸有エリアを起点とした社会課題解決型のコミュニティが形成されています。



2 リソースの繋がり

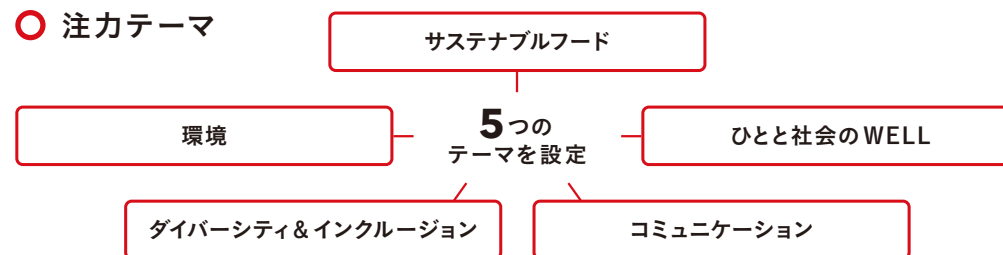
各社の持つリソースが有機的に繋がることで、個社ではなしえない幅広いテーマに対して探求・PJ化が進んでいます。



3 アプリの活用

アプリを活動全般の基盤とすることで、来街者・就業者の行動変容を促進。取得したデータの分析を通じた1,2の加速度的成長を目指します。

○ 注力テーマ



SDGsに含まれる広範なテーマの中から、実行委員会企業内で注力する重要テーマを設定。

○ 沿革

大丸有エリアは約5,000の事業所に約35万人が就業する日本を代表するビジネス街ですが、オフィス機能に加えて商業、文化、宿泊等、多様な機能と賑わいが溢れるこの街を、ビジネス以外の目的で訪れる人も年々増加しています。

大丸有SDGs ACT5は、このエリアに集まる多様な資源をオープンリソース型で掛け合わせ、人と人、知と知の結合によって社会課題の解決を目指す、「まちづくり×SDGs」というこれまでにない取り組みであり、2020年

から、三菱地所、農林中央金庫、日本経済新聞社を中心に複数の企業・団体が組成した実行委員会が主体となってこれを推進しています。

毎年各活動ごとに様々なステークホルダーや多くの地域と連携を図っており、今年度までに累計約300社と連携しながら、214個のアクションを創出。参加者は4年間で延約7万人に上ります。定番となった企画についても時流の変化を捉えながら内容の深化を続けると共に、新たな企画にも精力的に取り組んでいます。

今年度サマリー

> 定量データ

○ 協力企業数 **90社**
詳細 ▶ 28ページ
 昨年度 84社 (昨年度比 +6社)

○ 延アクション数 **62回**
 4ヶ年累計 214回

○ 延アクション参加者数 **35,543人**
 4ヶ年累計 約70,000人

○ アプリユーザー数 **4,160人**
登録者数
※アプリをダウンロードし、利用者登録まで完了した人
 昨年度 2,521人 (昨年度比 +1,639人)

○ ポイント付与店舗・拠点数 **63拠点**

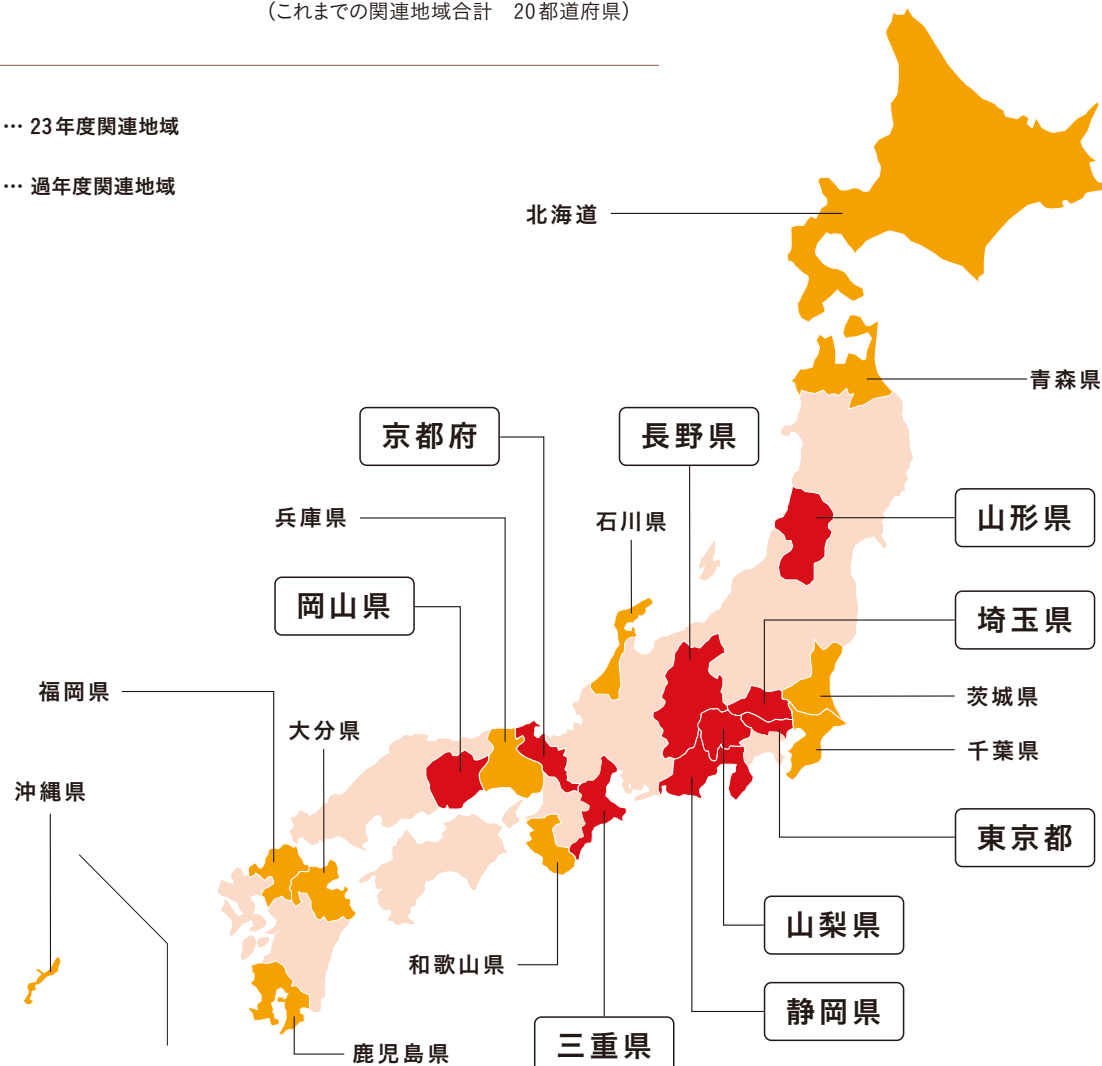
○ ポイント利用(交換・寄付) **3,824,703ポイント**

※寄付総額 **668,327円**

寄付先: クラダシ基金、Learning for All、フローレンス、
 国連UNHCR協会、世界自然保護基金ジャパン、
 宮古島海の環境ネットワーク
 (丸の内ポイントへの交換を除き、1ポイント1円に相当)

○ 関連地域 **9都道府県**
 (これまでの関連地域合計 20都道府県)

■ ... 23年度関連地域
 ■ ... 過年度関連地域



今年度サマリー

> ピックアップトピックス

PICK UP 1 農業とSDGsをテーマに セミナー・体験企画を開催

農業が食料生産や国土保全、地域経済の維持等の点で、SDGsとも繋がりが深いことを学ぶセミナーを開催しました。さらに、人手不足解消に向けた援農体験企画も開催。収穫作業のお手伝いをした他、園主との対談により農業への理解を深めました。延べ70名の方々に参加いただきました。

詳細 9ページ



PICK UP 2 Marunouchi Street Park 2023 summerにブース出店しました

夏休みの丸の内を訪れた方々に、展示・物販・ワークショップなどを通してACT5の世界観を「体感」してもらう場を提供しました。月曜から日曜まで1週間に渡って丸の内仲通り上にブースを設けました。週末は口コミやメディア放映を観て来た方なども増え、新たな層がACT5との接点を持っていただく機会となりました。



PICK UP 3 衣類回収企画 「PASSTO」を継続実施

エリアの方々が各家庭で不要になった衣類を、13か所に設置したポスト型BOXで回収。衣類を通じてサーキュラーエコノミーを体現する企画を、昨年に続き、今年度も実施しました。「充分着られるため廃棄するのはもったいない。リユースされるのであれば、提供したい。」という共感が広がり、延べ10,590名から提供された衣類の総重量は約2,400kgとなりました。

詳細 10ページ



PICK UP 4 映画祭を開催

多くの人に親しみのある映画を切り口に世界中の様々な社会課題に触れながら、その渦中にいる人たちのリアルな「顔」、「声」、「想い」に触れてもらう場を提供することを目的に今年も約3週間の期間に渡って計9回(内トークショー付8回)開催し、過去最多の700名を超える皆さまにご参加いただきました。

詳細 16ページ



PICK UP 5 ACT5メンバーポイントアプリの浸透

SDGs達成に向け個人の行動変容を促進し、大丸有エリアを起点としたSDGsアクションの好循環を生み出すために、今年度もACT5メンバーポイントアプリを(株)三菱総合研究所とともに展開しました。アプリ実装3年目となる今年度はイベントや店舗でのアクションに加え、SDGs関連のニュース(ESGジャーナル)を毎週アプリ上で配信し、日常的なアクションが増加したことでアプリの利用も増加、累計登録者数も4000名を上回りました。

※2024年度からはACT5のアプリ機能を「丸の内ポイントアプリ」に統合予定

詳細 17ページ



パッカーンと脳を割れ！ D&IからE&Jへ一歩踏み出すためのアクションとは

2023年度ACT5で、ある意味もっともアクティブで楽しかったのが、ACT4「D&I」ではなかったか。「D&Iを一歩進める」という意味でアルファベットを「E&J」とし企画した「E&Jフェス」を初開催。丸の内でパレードをするなど、大きな足跡を残した。その背景や活動への思いなどを中心メンバーの3人に語っていただいた。



(写真左から)

堀川 歩

株式会社アカルク
代表取締役社長

天野 友貴

三菱地所株式会社
サステナビリティ推進部
プロモーションユニット主幹

小国士朗

株式会社小国士朗事務所
代表取締役/プロデューサー

天野 ACT4「ダイバーシティ&インクルージョン(D&I)」では、勉強会やセミナーを重ね、個人や企業など多くの方に参加いただきましたが、さらに拡張するために、小国さんに相談したんですね。

小国 D&Iは誰もが知っている言葉で、なにかをやらなきゃいけないとは思っているんだけど、いざ自分になにかをすとなると何をしたいかわからないもの。だからせめて、文字だけでも「一歩前へ」進めようと思って、「E&J」にしてみました。さらにEはEnjoy、JはJoinと、楽しんで参加しようぜ、というメッセージを込めました。

堀川 E&Jとはなにか、ということに答えはなくて、常に問い続けるものなんだという小国さんの言葉に、私は雷に打たれたような衝撃を受けました。また、参加した

ら議論はめちゃくちゃ飛び散ってるし、スケジュールもめちゃくちゃで(笑)、でもその生み出す過程がすごく楽しく、この場がD&Iだなんて思いました。

天野 その結果23年度に開催したのが「E&Jフェス」だったわけですが、振り返ってどうでしょうか。

堀川 正直、想像以上でした。身近に楽しめるものになったと思います。これまでのD&IのイベントはLGBTQ+障がい者等のセグメントで行われることが多かったですが、E&Jフェスは誰でも参加できる横串を通したものでした。さらに、フォーカスしたのが当事者ではなく「未来の働き方」。それぞれの視点からビジョンを示したこともすごく新しかったです。

小国 めちゃくちゃ汗をかいて自分たちの手で作り上げたことに価値があったと思います。丸の内で500人規模

のパレードなんて普通ならイベント会社に依頼するでしょう。これをゼロから自分たちだけでやった。理念を謳うだけなら誰でもできる。自分たちでやるから分かることもあるし、何よりも誠実だと思う。説得力もある。言うだけの評論家はいらないんです。

天野 当日までどう実現するか分からないまま進めていましたが、予想以上に多くの当事者団体や企業の方々が「面白そう」と共感、賛同してくれたおかげで実現につながりました。自信にもなりましたよね。

小国 原風景を共有できたんじゃないでしょうか。原風景っていうのは、大きな理想は実現できてないけど、これを育てていけばきっと実現できるよっていうタネ。この原風景を共有できたことに価値があって、これが次へのエネルギーになるし、もっと面白い花を咲かせることができると思います。

堀川 パレード、ブース、前夜祭と、並行して同時進行でいろいろなことに取り組んだのはものすごいことでしたよね。

小国 私は企画を考えるときに絵空事を描けてよく言うんですよ。現実的に出来ることだけを考えるとこじんまりとまとまってしまう。一番困るのは中途半端なプロ。一番強いのは熱狂する素人でしょう。何も知らないから振り切ることができる。

天野 そうですよね、走り出してから足りないことに気づくんですけど、やらないわけにはいかないから頑張る。本当に実現できてほっとしました。一方でE&Jという今までにない概念を各所へ伝える事に苦労しましたし、当日の運営面でも反省点は沢山ありました。

堀川 大勢の多種多様な関係者がいて、コンセンサスを得るのに苦労したということはあると思います。「多様性」といえば聞こえはいいですが、実際は綺麗事ではありません。とても大変でしたが、本気で意見を言い合えて、結果としては良いものになったから、表裏一体のものかもしれません。

小国 E&Jとは何かという問いがブーメランになって戻ってきて、結構悩んで議論を重ねましたよね。お互いに結構生々しいエピソードも打ち明けたりして、議論が長引いた分、準備期間も短くなって。この苦労は、この先毎回出てくるとは思いますが。

堀川 一方でそこに心地よさもあったと思います。普段だと、「トランスジェンダーの堀川」みたいに見られがちですが、そこを離れてE&Jというコンセプトに集中し



て掘り下げることができたのは魅力的でした。

小国 正解がないから面白いんでしょうね。だから問い続ける。ただ、D&Iは「状態」なんですけど、「E&J」には楽しもうぜ、参加しようぜという動詞が入るんですよ。状態を作るのは難しいけど、動詞ならそこに何かをする余地がある。何かをした結果、そこにD&Iという状態があるというのが良いのかもしれない。

天野 ACT4はこの先、完成形がないE&Jを追い求める修業の旅になるのかなと思います。今後もD&Iに関心の薄い人や特に大丸有の企業・就業者を巻き込むためのワンステップになればと思いますが、どうですか。

堀川 丸の内での取り組みを汎用化することができればいいなと思います。同じことをやりたい地方や企業で展開できるようになったら面白い。また、E&Jの可能性はまだどこに着地するか分かりませんよね。いろいろな答えが返ってくるように問いを発信して、キャッチボールすることも大事だと思います。

小国 もっと脳をパッカーンと割っていきたいですね。『社会ムーブメントの起こし方』というTEDのムービー("How to start a movement" Derek Sivers)があるんですが、それは原っぱで男が上半身裸で踊っていると、1人、2人とだんだん人が集まってくるというもの。これいろんな示唆に富んだ映像ですが、一番は、最初に踊る男がとにかく楽しそうってことなんですよ。大人になったら普通いくらか躊躇があるじゃないですか。なのになんの照れもためらいもなく踊っている。そこに惹きつけられる。もちろんwhyの部分、理念は大事ですが、楽しければ老若男女立場問わず惹きつけられるし、それがD&Iになるでしょう。まず自分の立場躊躇なく原っぱで踊れる人間になること。その先にD&Iの新しいカタチが見えてくるんじゃないかと思っています。



アクション 1-2

食従事者と消費者をつなぐ「SUSTABLE (サステイブル) 2023～未来を変えるひとくち～」

「作り手」、「使い手」そして「食べ手」が集い、未来の食を考える

「SUSTABLE (サステイブル)」は、持続可能性に配慮された食材 (サステナブルフード) の普及を目指して2021年度にスタートした試食つきセミナーで、消費者が「食」にまつわる社会課題を知り、その先の具体的なアクションに踏み出すことを目的としています。

今年度もTOKYO TORCH常盤橋タワー3階のMY Shokudo Hall&Kitchenを会場とし、食の「作り手」である生産者やメーカー、「使い手」であ

るシェフ、そして「食べ手」である消費者が一つの会場に集い、サステナブルフードの美味しさを共有しながらそれぞれの立場で課題について考える場として、全5回のプログラムを展開しました。

多種多様なテーマ設定

2023年度全5回のテーマは「1. 食品ロスが生み出す新たな可能性」、「2. プラントベースという選択肢」、「3. 里山と里海をつなぐ循環型農業」、「4. 海を修復するアサリ養殖」、「5. 国際交流から学ぶ、持続可能な一次産業の未来」の5つで、フードロス問題から始まり資源循環や環境再生、

そして最終回は国際交流と多種多様なテーマを設定し、様々な観点から未来の食について考えました。

今年度の新たな取り組みとして、全回共通のファシリテーターであるハーチ株式会社の加藤佑代表が各テーマの概要や課題の所在について冒頭で解説を行いました。これにより食のサステナビリティについて学びたいすべての参加者が予備知識をもって登壇者のお話を聴講できるようになり、参加者の理解度を高めることができました。

登壇者やシェフからは、「売り手」、「買い手」、「社会・環境」、「未来」の『四方よし』を作り上

げることが、持続可能な食を実現する近道である」、「『あって当たり前』ではなく『無くて当たり前』という意識で生活してほしい」、「五感を使って食と向き合ってもらいたい」など、私たち消費者への熱いメッセージをいただきました。

会場参加者からは、「生産者前で食事をいただくということで、改めて食べ物をいただくことのありがたさを感じた」、「今後は食材を選ぶ際にその背景まで思いを巡らせて行きたいと思った」など、今後の行動改善につながる前向きな感想が寄せられました。

アクション 1-3

大丸有のプロ料理人向け「ジビエ料理セミナー」を開催しました

シェフが変わる、レストランが変わる、街が変わる

ジビエは、地方農山村被害の防止や既存の畜産業の拡大による環境悪化抑制につながるなどの観点でSDGs達成と深く関係しています。大丸有SDGs ACT5はこのジビエの普及を目指し、発足以来グルメフェアやセミナー開催を続けてきましたが、2023年度は日本ジビエ振興協会の協力のもと大丸有レストランのプロ料理人向けセミナーを開催しました。

会場である常盤橋タワー3階のMy Shokudo Hall&Kitchenには約25名のプロ料理人が集まりました。講師には日本ジビエ振興協会 代表理事

藤木氏をお招きし、ジビエの定義や歴史、ジビエとSDGsとの関係、そして安全にジビエを提供するための認証制度についてお話をいただくほか、会場キッチンにて調理実演も展開しました。実演では、鹿の枝肉を捌きながら、部位ごとの調理方法や美味しい食べ方、そして安全に提供するための注意事項やテクニックなどについてもお話しいただき、実践的なセミナーに参加者からは積極的な質問が飛び交い、有意義な時間となりました。

大丸有がジビエをはじめとするサステナブルな食材に出会える街となるよう、今後も活動を継続します。



アクション 1-1

大丸有エリアで販売される「サステナブルフード」とACT5公式アプリの連動

サステナブルフードでポイント獲得

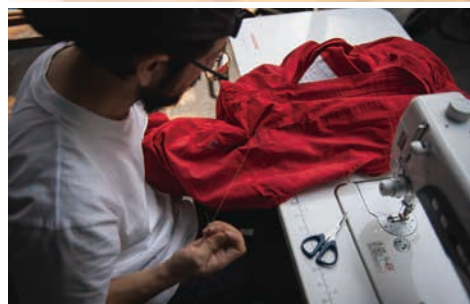
2023年度も昨年度に引き続き、大丸有エリアで販売されるサステナブルフード（持続可能性に配慮された食材）を購入すると、ACT5メンバーポイントを獲得できる仕組みを展開しました。

今年度は、紫野和久傳が環境保全の取り組みのひとつとして手掛ける「和久傳米」や、自然環境を修復しながら生産する「バタゴニア・プロビジョンズ」製品、環境負荷の高い動物性の食材を使用せずに作られたラ・メゾン・デュ・ショコラの「ガナッシュ ビーガン」、そして、エシレ・メゾン デュ プールがひび割れ等により販売できないサブレを有効利用した「サブレ・ア・タルティネ」という昨年のラインナップに加え、今年度は新たに丸ビル6階YAMAGATAおさけとおりよりDAEDOKOが提供するフレッシュホップビールを対象としました。

アクション 2-1 2-12 2-16 など

大丸有SDGs ACT5への協力店舗と連携し、日々のアクションによるアプリポイントの付与が定着

アプリ実装3年目の今年も、大丸有SDGs ACT5の趣旨に賛同、協力下さるエリアの店舗との連携を継続しました。大丸有エリア店舗でのマイボトル持参、サステナブルな商品の購入、衣類や雑貨のリペア、不要となった衣類や容器の回収、ACT5 イベント参加など、SDGs達成につながる個人のアクションを通じてポイントを獲得できるACT5メンバーポイントアプリ。今年度は63の協力店舗・拠点においてポイント付与を行いました。これによって、来街者やエリアで働く方々にとって、日々のアクションによるアプリポイントの付与が身近な存在として定着し、人々の行動や経済活動を通じたSDGs貢献を促進させることが出来ました。



アクション 2-24

農業の衰退はSDGsにも影響？課題を学び、援農しよう～セミナー&体験企画～

農業とSDGsの関係について学び、労働力不足を支援

農林中金総合研究所の小針氏、農ジャーナリスト/ベジアナの小谷氏をお迎えし、農業は食料生産や国土保全、地域経済の維持等の点で、SDGsとの繋がりが深いものの、高齢化による労働力不

足等が深刻であることを学びました。

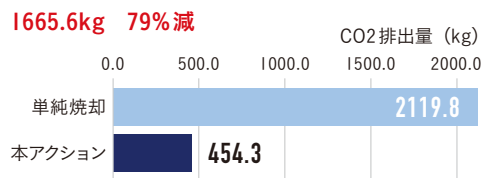
また農協観光の石井氏より、労働力不足を解消したい生産者と、農業を応援したい(=援農)人をマッチングする「JA援農支援隊」の取り組みや、援農によるメンタルヘルス向上効果について、お話しいただきました。

「援農したい!」という方々には、埼玉県三芳町の高橋農園にて、さつまいもの収穫・選定作業をお手伝いいただきました。秋晴れの下、気持ちをリフレッシュしながら収穫作業を楽しみました。また園主の高橋氏より、人手不足の現状について生の声を聞き、援農の重要性について学びました。



環境負荷低減効果

● CO2 排出削減効果 (単純焼却比)



● 分別結果 (%)

国内リユース	22
海外リユース	69
リサイクル (ポリエステル原料)	2
アップサイクル (反毛)	6
廃棄	1
合計	100

アクション 2-7

衣類回収企画「PASSTO」

エリアの来街者、就業者の方々から、家庭で不要になった衣類をエリアの13か所にポスト型のBOXを設置して回収。延べ10,590名から提供された衣類の総重量は約2,400kgとなりました。焼却処分を最小限に留め、更には、素材としてのリサイクルよりもリユース活用を優先することで、環境負荷の低い資源循環の仕組みとなっています。回収した衣類は、約90%を国内外でリユース活用し、焼却処分に対して約1,666kgのCO2排出を削減することが出来ました。

アクション 2-21

生物を切り口に事業を展開するスタートアップ企業と、生物を専門とするNPOによるセミナーを実施



大丸有エリアには実は多種多様な生物が生息しています。アプリを使った市民調査と専門家調査という、異なる手法による調査を行った2者、バイオーム：多賀氏、生態教育センター：佐藤氏により、このエリアの生物多様性の豊かな実態とその可能性について講演をいただきました。この大丸有エリアを通して、気候変動と並び地球規模の課題である生物多様性について学ぶ機会となりました。

また、昆虫の力でごみを資源化し、世界の資源不足の解消を目指すスタートアップ企業であるTOMUSHI：石田氏と、大丸有エリアで専門家調査を続ける生態教育センター：高橋氏を講師に迎え、親子向けの教育プログラムを実施しました。多様な生物が生息し、また新たなビジネスが生まれる街である大丸有エリアならではの、生き物の魅力と可能性について学ぶ機会となりました。

アクション 2-27

最前線で活躍する専門家が、「未来をつくる投資」のリアルを語り合いました



これからのサステナブルな世の中を金融の面からつくるESG投資とインパクト投資は、年々その存在感を増しています。ESG投資の専門家である、農中金全共連アセットマネジメント：近藤氏、インパクト投資の専門家であるGLIN Impact Capital：中村氏より、それぞれの特色、共通点と違い、そして思い描く将来像について、講演を頂きました。私たち個人の気づきと学びに、そして、今からできることへのアクションに繋げる機会となりました。





アクション 3-2

「体を動かしながらごみ拾い」
プロギングイベントを6回実施

歩いたりジョギングしたりと体を動かしながら、街に落ちているごみを拾う、北欧生まれのSDGsスポーツ：プロギングのイベントを、一般社団法人プロギングジャパンの協力と三菱地所プロパティマネジメントが企画する、エリアを訪れる方々へのおもてなしの取り組み「丸の内アンバサダー」との連携により、6月から11月に毎月実施しました。

ACT5で実施するプロギングの目的は、1. 参加者同士の交流の促進、2. 地域のコミュニティ活性化、3. 地域の美化活動、4. 参加者の運動不足の解消、健康づくりの主に4つです。

今年で3年目となるこのイベントは、徐々に認知度が高まり、1回あたりの参加人数が増えたことに加え、職場の仲間によるグループで参加する事例がふえたことが、特色として挙げられます。大丸有



エリアにおいて、従業員に就業時間中のボランティア活動を推奨する企業が増え、その活動の受け皿になっているようです。

全6回で、合計225名にご参加いただき、53.5kgのごみを拾うことが出来、参加者のWELL-BEINGの実現と街の美化に繋がる機会となりました。



アクション 3-3

【大丸有×伊豆下田】
下田MIRAIカレッジプロジェクト

都市ワーカー・地域ワーカー・地元高校生の
三者が繋がり相乗効果をもたらすコミュニティ

昨年度、伊豆下田と都市をつなぐブリッジ人材協力のもと、下田が抱える社会課題を探索し、都市ワーカーがどのように関わることができるかの可能性を模索し続けた「下田MIRAIカレッジプロジェクト」。今年度は、下田の将来を担

う高校生や地域ワーカーと共に、下田の魅力や課題についてディスカッションするワークショップや、高校生の職業体験機会としてオンラインでのインターン企画を実施。高校生にとっては、地元を意識に向け自ら考え行動するきっかけが得られたと共に、様々なバックボーンを持つ都市ワーカーや地域ワーカーと交流することで“働く”ことに触れる体験となりました。一方、都市ワーカーや地域ワーカーにとっても、地域の社会課題について様々な人の視点を共有し、解決へのアプローチと一緒に探る中で、各人のwell-being向上に繋がった企画となりました。

アクション 3-7

Minecraftカップ 応援企画

子供たちが街のクリーンエネルギーについて学びながら丸の内を歩き、Minecraftで未来の街を表現

世界で活用されている教育版Minecraftを使用し、子供たちのプログラミング教育やデジタルなものづくりの機会創出を目指して開催されている「Minecraftカップ」。その応援企画として、丸の内を歩きながら今年のテーマである「クリーンエネルギー」について学び、関連する施設の見学や「打ち水」に参加することで興味・関心を高めるワー



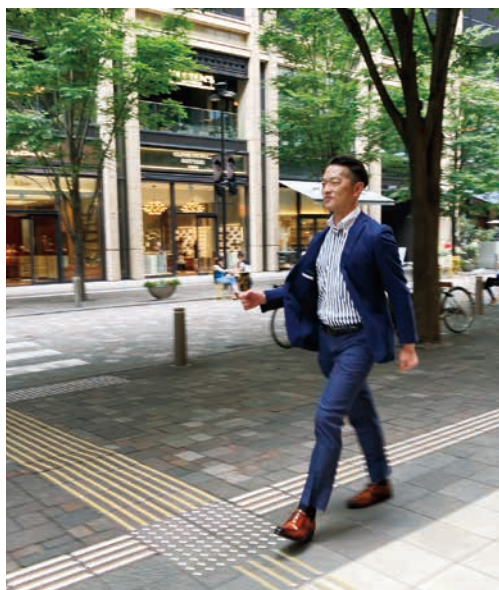
クショップを開催しました。実際に体験したことを踏まえチームでものづくりを体験する貴重な機会となりました。

アクション 3-1

チャリティウォーキング

たくさん歩いてSDGsに貢献する団体へ寄付 参加者の健康増進と寄付促進を実現

ACT5メンバーポイントアプリの歩数カウント機能を活用し、1日8,000歩超を達成した場合に獲得できるポイント数と同ポイント分を、SDGs活動に取り組む団体へ寄付する取り組み。昨年度に続き団体への寄付につながることをモチベーションに歩く参加者も多く、8,000歩超を達成した回数は延55,000回以上、団体への寄付総額も550,000円を超える結果となりました。



アクション 3-5

ハイブリットセミナー「MY PINK ACTION 知ろう、自分と乳がんのこと。」

乳がんを正しく知り、自分に合った適切なアクションを起こすための基礎知識を伝授

早期発見で9割以上の方に治癒が期待できるにもかかわらず、検診受診率が50%に満たない乳がん。このセミナーでは、乳がんを正しく知り自分に合ったアクションを起こすための基礎知識を専門医から解説いただいたと共に、乳がんになってからも自分らしく生きることの大切さを体験者からお話いただきました。参加者からは「日頃からのセルフチェックや検診の大切さを再確認した」との声が多く聞かれる企画となりました。



アクション 3-6

丸の内ラジオ体操

ランチタイムに丸の内仲通りで心身ともにリフレッシュ

丸の内仲通りの風物詩となったラジオ体操。15回目の開催となった今回は全7回、参加者は過去最多の延べ1,014名となりました。全国ラジオ体操連盟の指導者によるワンポイントレッスン

や、ティップネス丸の内スタイルのインストラクターによるウォーミングアップ企画も実施し、午後の仕事前のリフレッシュとして定着しました。



ACT 4 ダイバーシティ&インクルージョン

アクション 4-4

企業の社内事例とホンネを聞く！ 「ぶっちゃけLGBTQへの取り組み “ここ”に悩んでいます」

LGBTQの権利啓発の活動が行われる6月のPRIDE月間にちなみ、主に企業担当者を対象に、LGBTQに関する社内の取り組み事例や失敗例・成功例を含めた本音トークと交流会を開催。ゲストには、電通グループから当事者で社内でカミングアウトされた方、上司の方、人事の方をお迎えし、社内でのどのように連携し対応されたのか、それぞれの立場から具体事例を元にお話しいただき、J.P.モルガンのご担当者からは社内の取り組みやアライコ



ミュニティを作る上での課題や成功事例等についてお話しいただきました。当日はエリア内外の企業担当者に多くご参加いただき、普段聞きづらい企業の実例や、当事者だけでなく企業担当者の体験談を交えたリアルなお話しに、自社で取り組む上でも参考になったという意見を多くいただきました。

トーク後はゲストを含めた交流会も開催し、企業担当者の情報共有やネットワークの機会となりました。



アクション 4-5

丸の内 Shall We コンサート ～共生社会の実現に向けた一歩を音楽から～

障がいの有無に拘らず、感動を糧とする子ども達の心の成長を願いながら、共に音楽を楽しむ

都心への外出体験や生の音楽に触れる機会が少ない特別支援学校の生徒の皆さんを、本格的ホールである東京国際フォーラムにご招待。N響メンバーによる木管五重奏により、クラシックを中心に親しみある曲の演奏や楽器の紹介などが繰り広げられ、障がいの有無を超えて音楽や楽器の面白さを一緒に学び、感動を共有しました。この外出体験や音楽鑑賞が子ども達の成長の糧となるとともに、社会の共生意識がより高まっていくことを目指しています。

アクション 4-6

キラキラとアートコンクール マルキューブ審査会

作品を楽しみながら子どもたちの可能性を応援

障がいのある子どもたちの可能性を応援したい、との想いから三菱地所が2002年にスタートした絵画コンクール。一連の審査の一部として、丸の内の就業者・来街者による審査会をACT5の協力のもと開催しました。1次審査を通過した150作品が丸ビル・マルキューブに並び、海外からの観光客も含め2日間で400名以上の方に絵を鑑賞しながら審査に参加いただきました。



ACT 4

ダイバーシティ&インクルージョン



アクション 4-2

街あるきユニバーサルマナー研修

自分とは違う誰かの視点にたち、行動するためのマインドとアクションを学ぶユニバーサルマナー研修。今回は講義の後、実際に視覚障害・高齢者・車いすのいずれかを体験しながら丸の内を歩くオリジナル研修を実施しました。

視野狭窄や難聴、歩行困難を体験するキットを身につけて歩く高齢者体験等、実際にどのようなことに困っているのかを体験することで、身につけた知識を行動に繋げる契機となる研修となりました。



アクション 4-7

E&Jフェス! 集まれ 未来のアタリマエ D&Iをみんなで一歩前に進めるフェス

都内初となるダイバーシティパレードを開催!

「E&J」は「D&I (ダイバーシティ&インクルージョン)」をアルファベット順にひとつ進めたもの。「D&Iの取り組みを一歩進める」「これからは誰もがEnjoy & Join (E&J) でD&Iを推進する」という思いを込め、誰もが楽しみながら、未来の多様性について考えるイベント「E&Jフェス」を2日間にわたり開催しました。

1日目にはトークイベントを開催。当事者や有識者、先進的取り組みを進める企業の方や、社会的発信に取り組む方など多様なゲストを招き、多様な働き方・生き方の実践のお話や、企業の取り組み事例、また「誤解の多いダイバーシティ経営」につ

いて盛りだくさんにお話しいただき、企業担当者の方を中心に多くの方にご参加いただきました。

2日目には、メインイベントとして都内で初となるダイバーシティパレードを開催。大丸有エリアの就業者や来街者等にD&Iについて広く知っていただくことを目的に、日本で初めて本格的な賃貸オフィスを整備したビジネス街である丸の内を舞台に、ビジネスパーソン“働き方”の歴史を「過去」「未来」に分けて表現。「過去パート」では明治から現代までの働き方の変遷をパネルや当時の服装等で紹介し、「未来パート」では、障がい者やLGBTQ等当事者団体、農福連携、パラアスリート、アライなど多様な人々が一堂に会し、多様な人が活躍できる社会“未来のアタリマエ”を表現しました。

その他、アートワークショップやユニバーサルスポーツ体験、各ブース展示・販売等も開催し、E&Jフェスを通して障がいの有無や性別などに関わらず、多くの方にご参加いただきました。

E&Jフェス!
紹介動画はこちら



アクション

「日経大丸有SDGsフェス2023」ハイブリッド開催

多様なコンテンツを発信し、1万8千人が参加

4年目を迎えた「日経大丸有SDGsフェス2023」は昨年同様ハイブリッド形式で開催しました。今年度は211人の講演者を招き、5月と9月の12日間にわたり、日経ホールと丸ビルホールで合計16のイベントを実施。同時に日経チャンネルでもオン

ライン配信をおこない、参加者や視聴者の総数は1万8千人に達しました。

23年5月の新型コロナウイルスの5類感染症移行に伴い、リアル会場への来場を促すため、「ACT5メンバーポイントアプリ」との連携を強化しました。9月開催時には、来場者に提供するACT5メンバーポイントを200ポイントから1000ポイントに大幅に増やしました。また、同アプリのダウンロードや利用を促すため、昨年同様日本経済新聞紙面や各イベント会場で広く告知をしました。

コンテンツ面では、「NIKKEIブルーオーシャン・フォーラム」、「ジェンダー・ギャップ会議」といっ

たトラックに加え、SDGsのすそ野の広がりを捉え、新たに少子化問題やこどもの様々な学びを議論する「日経こども未来経済フォーラム」を開催しました。

NIKKEIブルーオーシャン・フォーラムでは笹川平和財団理事長の角南篤氏を中心に対馬市、南三陸町、ウォルトンファミリー財団、東北大学などの関係者が海洋保全をテーマに大阪・関西万博につながる議論を行いました。ジェンダー・ギャップ会議にはスプツニ子!氏や内閣府特命担当大臣 小倉将信氏、G20 EMPOWER インドネシア共同議長 Rinawati Prihatiningsih 氏などが登壇。女性活躍推進やその意義を伝えました。こども未

来経済フォーラムでは、こども家庭庁の渡辺長官やパトリック・ハーラン氏、元陸上選手の為末大氏、大阪・関西万博テーマ事業プロデューサーである中島さち子氏など各分野の専門家が集まり、子育てやこどもの可能性などをテーマにディスカッションを展開しました。

5月、9月のフェス全体に通じて、講師には著名な経済学者から高校生まで多様な顔ぶれが揃いました。今後も日経大丸有SDGsフェスでは、多くの関係者を招き、様々なテーマで議論を深め、広く情報を発信していく予定です。2030年のゴールを見据え、SDGs達成に貢献します。

COMMENT



大丸有SDGs ACT5 副委員長
平田 喜裕
日本経済新聞社 取締役副社長

日経SDGsフェス2023は多くの方々に参加いただけるように会場でのリアル聴講とオンラインでの視聴機会を提供するハイブリッド形式で開催した。新聞やウェブサイトだけでなく、BSテレビ東京も活用。日経SDGsフェスの登壇者の取り組みや大丸有でフードロス減らすアクションを特別番組内で取り上げた。

集客面でも「ACT5メンバーポイントアプリ」との連携を強化し、大丸有ならではの立体的なアプローチでの訴求に注力した。

5年目となる2024年は日経グループの発信力とコンテンツ力を生かし、これまで以上に街の魅力を伝え、人の流れを促したい。大丸有エリアの企業や団体を巻き込み、さらに大きなムーブメントにしていく。





アクション 5-4

日常が戻った今こそ、
観るだけでは得られない人のつながりを感じる
「大丸有SDGs映画祭2023」を開催しました

「今知っておくべき世界のコト」を感じ、考えるきっかけを提供

多くの人に親しみのある映画を切り口に、様々な社会課題に触れながら、その渦中にいる人たちのリアルな一面に触れてもらう場を提供することを目的に、大丸有エリア内の様々な空間をミニシアターに仕立て、開催しています。

今年はこちら数年で日本でも深刻化している貧困問題を取扱った作品をオープニング作品に据え、ビッグイシュー誌の購読者でもありドナルドマクドナルドハウスのサポーターとしてもご活躍されている元宝塚歌劇団の美弥りかさん等をゲストに招き、経済的に貧困であっても人や社会とのつながりの貧困にならないことの大切さについて考えました。

その他にも今年は「寄付・支援のあり方」や「気候変動とそれ

以外の問題の連鎖」など、一般に認知されつつある社会問題の「一歩先」に注目して深く掘り下げたり、映画とトークショーの間に参加者同士での感想をシェアする時間を取り入れるなど、双方向的なコミュニケーションが生まれる場となりました。

クロージングでは東京国際フォーラムを会場に劇場公開前の「ミッション・ジョイ」を先行上映し、シリア、イラク、ヨルダン等の難民キャンプを何度も訪れ、音楽活動を通じた支援をされているミュージシャンのSUGIZOさん等をゲストにお招きし、戦争や紛争の苦しさや日本に於ける震災の共通点などについて考えました。

今年は日常が戻ったこともあり、全回満席を達成！（雨天による屋外から屋内への振替回を除く）計700名超のご参加者にはりピーターの方も年々増えており、本映画祭の拡がりや深まりを感じる一年となりました。

POINT

- ✓ 大手町仲通りでの屋外上映が雨天場所変更となり、大手町フィナンシャルシティのアトリウムにて初実施。夜間のビルエントランスの有効活用という大丸有ならではの空間使いの可能性を見出しました。

アクション 5-5

東京ビエンナーレ2023
「Slow Art Collective Tokyo」を開催しました

Slit Parkを含む大丸有の3会場に拡がり、
参加型のSlow Artを同時開催！

東京ビエンナーレは世界中から多様な作家やクリエイターが東京に集結し、まちに深く入り込み、地域の方々と一緒に作り上げていく国際芸術祭です。

2022年のプレ開催に引き続きメルボルン在住のSlow Art Collectiveによるアートプロジェクトが実施されました。持続可能性や多文化共生をテーマに誰でも参加可能なワークショップや作品制作を大丸有それぞれ3会場を使って展開し、ワーカーや海外旅行者、親子連れなど幅広い層が会場を訪れ、作品をつくりながらアートを通じた交流が生まれました。

また、大丸有で企業の障がい者雇用を支援する施設「インクル丸の内」を通じ、就労移行支援事業所「るりはり渋谷」の通所者向けのワークショップもトライアル実施しました。

POINT

- ✓ 2023年は大丸有以外の都内の複数エリアも会場に夏会期・秋会期に分けて多面的に開催されました。TVメディアでも数多く取り上げられたこともあり、Slow Art Collectiveの参加者数も約9000名となりました。

ACT5メンバーポイントアプリ



開始から3年目となるACT5メンバーポイントアプリ SDGs活動を重ねることでさらなる行動変容へ

「ACT5メンバーポイントアプリ」は、大丸有エリア内で行われるSDGs活動に対し、エリア独自の「ACT5メンバーポイント」を付与するツールです。2022年度はコア期間終了後もアプリを閉じることなく、既存ユーザーの方は2023年度も継続してご利用いただきました。基本となる機能（ポイント獲得/利用、メッセージ配信、友達紹介、一定歩数以上歩くとチャリティ活動を行う団体に自動的に寄付されるチャリティウォーキングなど）は変わらず、獲得可能ポイント数が10,000ポイントと2倍になったことでアクションへの参加機会が増し、大丸有エリアのSDGs活動を楽しんでいただけるよう推進してまいりました。たまったポイントの交換先となるSDGsに寄与する特典取り扱い店舗も増え、さらにSDGs活動が広がるという好循環の仕組みづくりも進んできています。

※コア期間とは、5つのテーマでアクションを展開する期間。2022年度は5/9～11/30、2023年度は5/8～11/30

SDGs活動の誘発と循環

アプリを通じたポイント利用数は3,267,043ポイント（チャリティウォーキング達成による寄付を含まず）となり、SDGs活動参加により付与されたポイントの約9割がSDGsに関連する特典交換や寄付、丸の内ポイントとしてエリアの消費に貢献しています。

利用者数※	4,160名
SDGs活動の総実施件数	90,275件
総ポイント付与数 3,725,430ポイント	
総ポイント利用件数	2,834件
総利用ポイント数 3,824,703ポイント	
※チャリティウォーキング機能での寄付を含む	

※アプリをダウンロードし、利用者登録まで完了した人数

2023年度ACT5メンバーポイント実証成果

アプリ継続の効果

意識や行動変容には一定程度の時間を要することや、身近な活動の提供が行動変容のきっかけとなり得ることが示唆されました。⇒ [2](#) [3](#)

チャリティウォーキング機能やESGジャーナルの定期配信のような定期的にアプリを開く仕掛けがアプリ利用促進に有効だと考えられます。⇒ [4](#)

ウェルビーイング向上効果

大丸有SDGs ACT5への参加が個人のウェルビーイング向上の一助となっている可能性が示されました。⇒ [5](#)

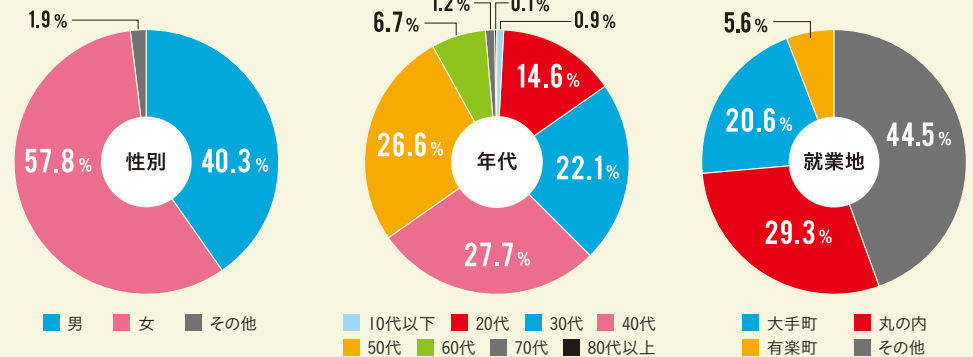
利用者からの声

SDGs活動への意識の高まりや行動の継続意向が示されたほか、ポイント利用先の充実が活動のインセンティブとなること示唆されました。⇒ [6](#)

1 ACT5メンバーポイントアプリ登録者の属性や就業地

ACT5メンバーポイントアプリ登録者は、女性が6割を占め、40代、50代で過半数を占めています。また、勤務地は大丸有エリアの丸の内と大手町が半数を占め、エリア外の「その他」が5割弱という構図になっています。

(N=4,160)

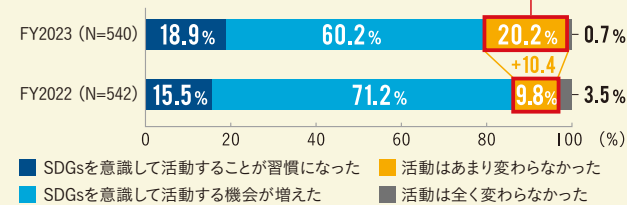


2 SDGs活動に対する意識変化 活動時期による違い

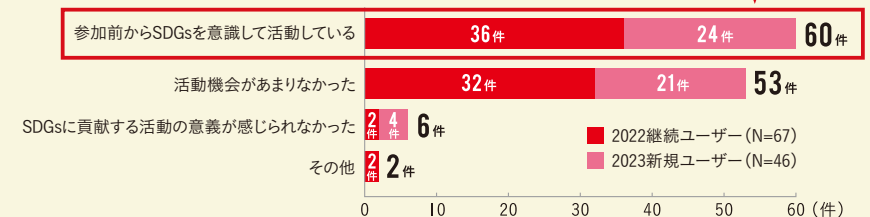
2023年度ACT5大調査では、「活動はあまり変わらなかった」が増えましたが、これは、2022年度からの継続ユーザーを中心に、「参加前からSDGsを意識している」ユーザが多かったことを示しています。

※ACT5大調査とは、全利用者を対象に実施した大丸有SDGs ACT5全般に関するアンケート調査。2022年度は、2022/11/11～24、2023年度は、2023/11/7～20に実施

▼SDGs活動に対する意識変化



▼活動が変わらなかった理由 (N=113)

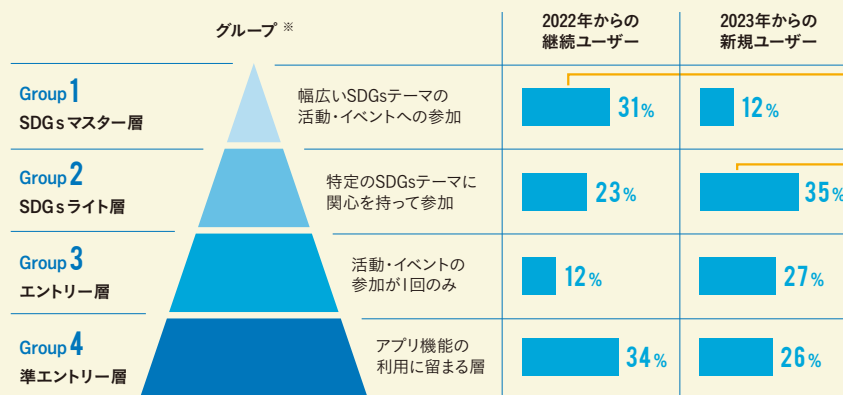


ACT5メンバーポイントアプリ

3 アプリ継続の効果 継続ユーザーと 新規登録ユーザーの特徴

2022年度からの継続ユーザーは、幅広いSDGsテーマへの活動参加が多く見られ、経験による活動の定着や広がりが見られました。一方、2023年度新規ユーザーはSDGsライト層が多く、行動変容には一定程度の時間を要することを示唆しています。

※2023年5月～12月にアプリを利用した1,475人について、活動・イベントへの参加実績でグループ分け



Group1の継続ユーザーは「熱烈SDGs女子」が多くみられる

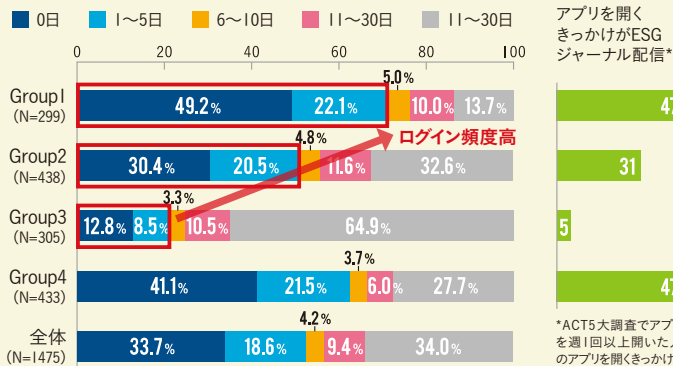
- ・リアルイベントの参加率が高く5回/人
- ・マイボトル・マイカップ利用は習慣化が見られ、活動参加者においては約20回/人、新規ユーザーと比較して約7回/人多い
- ・チャリティウォーキング達成回数も新規ユーザーの約2倍となっている（継続ユーザー81回/人、新規ユーザー45回/人）

Group2の新規ユーザーは「しっかり者ポイ活マダム」の傾向あり

- ・参加した活動は「衣類回収」が最も多く、活動参加者1人あたり29回。グループ×登録時期の中でも最多
- ・次いで、マイボトル・マイカップ利用やエコバッグ利用が多く、活動場所が多く日常的な活動は、新規ユーザーでも繰り返し参加が見られることを再確認。ポイ活しつつ、サステナブルも同時に実践
- ・化粧品空き容器回収やロス弁購入などに繰り返し参加するユーザーも見られ、参加者にとって身近な活動が参加のきっかけになるものと推定
- ・ポイント利用先は丸の内ポイントへの交換が多い

4 チャリティウォーキング機能や 定期的なお知らせ配信がアプリ利用を促進する可能性

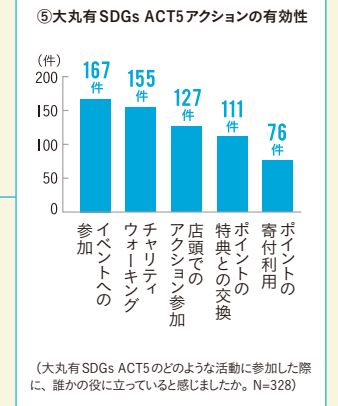
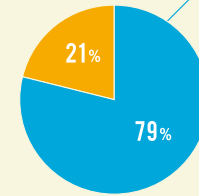
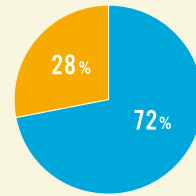
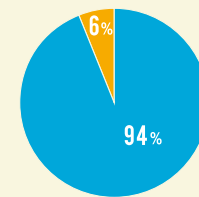
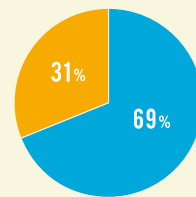
活動数が多く、参加の幅が広い層ほどアプリの起動頻度が高い傾向が見られました。Group4では、チャリティウォーキング機能の活用が定着していることが推測されます。また、ACT5大調査よりESGジャーナル記事の定期配信もアプリを開ききっかけとして有効であることが示されました。



5 大丸有SDGs ACT5の ウェルビーイング向上効果

ウェルビーイングが高い人には、大丸有SDGs ACT5への参加が個人のウェルビーイング向上に影響を与えた可能性が認められました。また、誰かの役に立っていると感じた活動には「イベントへの参加」や「チャリティウォーキング」などが上位にあげられています。

※ACT5大調査のウェルビーイングに関する設問で、ポジティブな回答をした回答者を対象（各回答は①～④のグラフ下・「概ね」の回答含む）



6 利用者の声

SDGsを意識するきっかけになったり、活動定着や継続意識の高まりが認められました。またポイントや特典などが活動参加のインセンティブになっています。

*ACT5大調査の回答をそのまま転記

「昨年から参加しています。意識を改めるきっかけにしています。」

「これからも意識して生活していきたいと思います。」

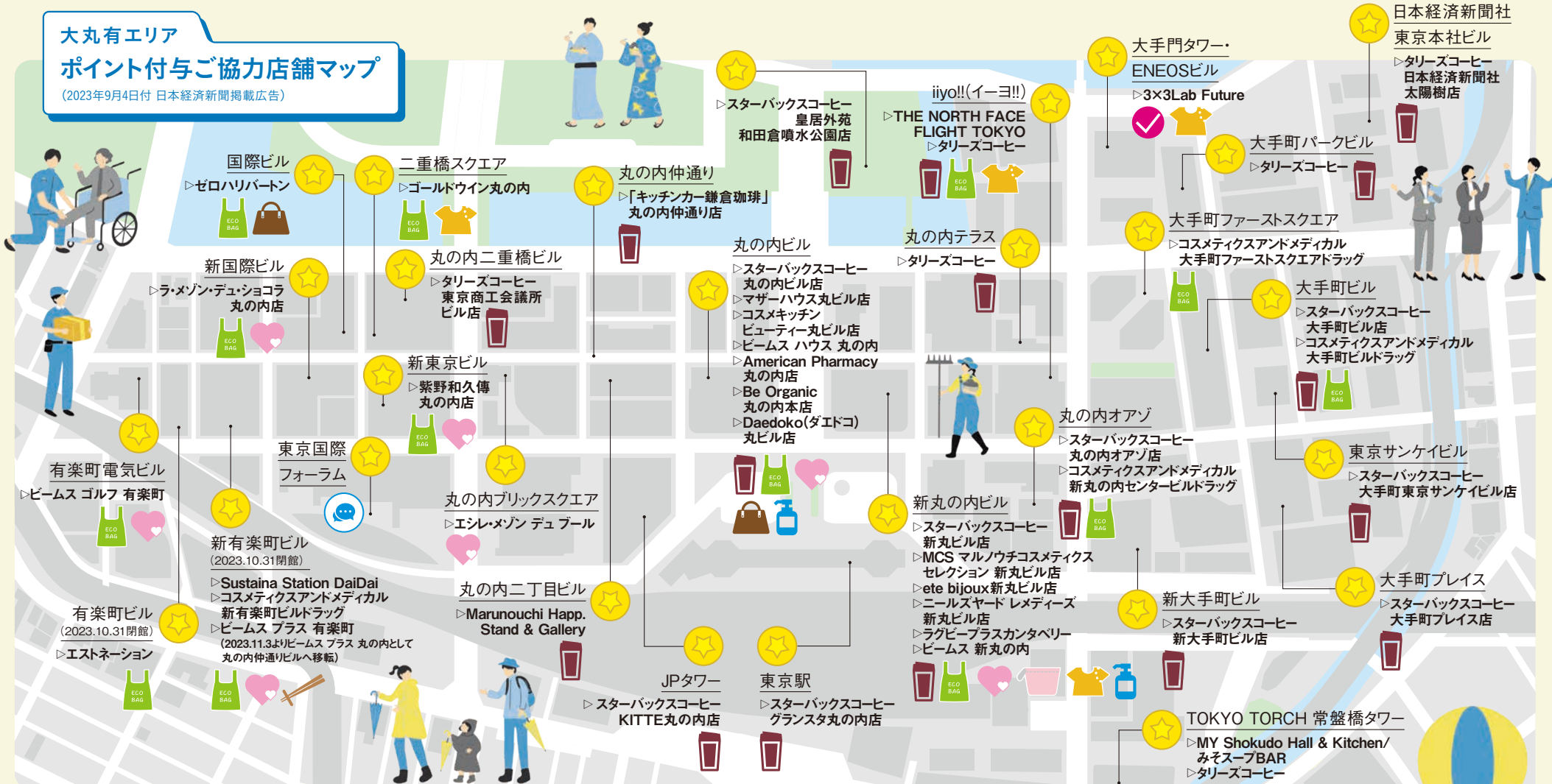
「歩数の計測がきっかけでこまめにアプリを開くようになった。ポイントも貯まって、商品と交換できたのも良かった。」











「チャリティーウォーキングでは8000歩を意識し、運動不足が少し解消された気がします。」

ACT5メンバーポイントアプリ

大丸有エリア ポイント付与ご協力店舗マップ

(2023年9月4日付 日本経済新聞掲載広告)



-  ACT5メンバーポイント
アプリ協力店
-  エコバッグ利用・
シヨッパー辞退
-  マイボトル・
マイカップ利用
-  チェックインで
ポイント付与
-  マイ箸の持参
(店内のお食事、お弁当購入)
-  サステナブルフード/
エシカル商品の購入
-  衣類修理サービスの利用/
使わなくなった衣類の回収
-  eteマイジュエリーポーチ・
ボックスの利用
-  空容器の回収
-  ケアサービスの利用
修理サービスの利用
マザーハウス レザーバッグの回収

メディア掲載一覧

日本経済新聞 全国版 朝刊

副委員長企業の日本経済新聞社と連携し、プロジェクトへの想いや内容について全国版にて広告が掲載されました。(2023年5月、9月)
2023年5月2日付および9月4日付 日本経済新聞朝刊「日経大丸有SDGsフェス」広告企画より一部転載



WEB/新聞等

各テーマのプロジェクトが各種メディアに掲載されました。

TV

街あるきユニバーサルマナー研修やSUSTABLE、ポイントアプリ等ACT5の取り組みについて紹介されました。
BSテレビ東京「未来を創るキーパーソン ～日経SDGsフェス2022～」2023年9月9日放送
(日経チャンネル、Channel JAPANでも同内容を配信)



「大丸有SDGs ACT5 × IDEAS FOR GOOD Museum～循環緑日 大人も子どもも楽しく資源循環を体験できる緑日」について紹介されました。

フジテレビ 「LiveNews α」 2023年8月30日放送



有識者からのコメント

2024年からSDGs実施は後半戦に： 日本を代表するビジネス街・ 大丸有だからこそ 「企業風土」改革を

今回で4回目となる「大丸有SDGs ACT5」は、日本を代表するビジネス街を現場に、様々なアクターがゆるやかにつながって企業風土をSDGs型にしていこうという取り組みとして画期的です。

2023年のハイライトは、D&Iの取り組みを一步進めた「E&Jフェス」で「大丸有ヒストリカルパレード」を実施したことでしょう。日本初のビジネス街である丸の内だからこそ企画を事務局や関係者が知恵を出し合って考え、ビジネスパーソンの「働き方」の歴史を過去と未来に分けて描きました。「過去パート」では明治から現代までの働き方の変遷を紹介し、「未

来パート」では障がい者やLGBTQ等当事者団体、農福連携、パラアスリート、アライなど多様な人々が参加し、多様な人が活躍できる社会を「未来のアタリマエ」として表現しています。こうしたナラティブを手作りでまとめたプロセスは、D&Iのメッセージを企業風土に定着させる上で財産になるでしょう。

2023年夏には「国連『ビジネスと人権』作業部会」が初の訪日調査を行い、調査完了にあたっての声明で「女性や障害者、先住民族、部落、技能実習生、移民労働者、LGBTQI+の人々など、リスクにさらされた集団に対する不平等と差別の構造を完全に解体することが緊急に必要」と強い警鐘を鳴らしています。大丸有に拠点を持つビジネス界がD&I課題に真剣に取り組むことには、大きな波及効果があるものと期待しています。

2024年、私たちは2030年に向けたSDGsの実施の後半戦にいます。コロナ・気候危機・紛争によ

る物価の高騰などでSDGsの進捗は後戻りを余儀なくされ、評価可能なSDGsのターゲットのうち順調に進んでいるものは15%にしかすぎません。後半戦では、再エネ、デジタル化、食料システム、気候対策などゲームチェンジャーになり得る波及効果の大きな分野をテコにしていかなければ間に合いません。

中でも気候変動は、2023年新語・流行語ベスト10にランクインしたグテーレス国連事務総長の「地球沸騰化」が示すように、私たちの現行の対策をは

るかに凌ぐスピードで進んでいます。産業革命前からの地球の気温上昇を1.5°Cに抑えるには、再エネ中心の社会経済に大きく舵を切ることが不可欠です。ACT5の皆さんには、気候変動への危機感醸成と気候アクションへの関心を呼び起こす「1.5°Cの約束—今すぐ動こう、気候変動を止めるために。」キャンペーンの公共広告を、大丸有エリアのサイネージで1600回以上も放映していただきました。この場をお借りして、心から御礼申し上げます！



国連広報センター所長

根本 かおる氏

Kaoru Nemoto 東京大学法学部卒。テレビ朝日を経て、米国コロンビア大学大学院より国際関係論修士号を取得。1996年から2011年末まで国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）にて、アジア、アフリカなどで難民支援活動に従事。ジュネーブ本部では政策立案、民間部門からの活動資金調達のコーディネーターを担当。WFP国連世界食糧計画広報官、国連UNHCR協会事務局長も歴任。フリー・ジャーナリストを経て2013年8月より現職。2016年より日本政府が開催する「持続可能な開発目標（SDGs）推進円卓会議」の構成員を務める。2015年以来、SDGsの重要性を訴え続けたことが評価され、2021年度日本PR大賞「バーソン・オブ・ザ・イヤー」を受賞。

増加の一途を辿る人道危機 「社会全体で取り組む難民支援」 の重要性

大丸有SDGs ACT5の取り組みの一つである「大丸有SDGs映画祭」では、4年前の開始当初から、難民問題をSDGsの重要な課題の一つとして焦点を当てて頂いていることに改めて御礼申し上げます。

昨年は、ウクライナでの紛争終結が見通せない中、各地で紛争や暴力が深刻化し、中東では悲惨な人道危機が今も続いています。現在、報道が少なくなっているシリア、アフガニスタン、スーダンなどで

の状況も依然深刻であり、紛争や迫害で故郷を追われている人々は世界全体で1億1000万人を超え、日本の人口に迫りつつある勢いです。そこには、私たちと変わらない一人ひとりの人生のストーリーがあり、人々の苦難や希望、生きぬく意志を伝える映画の役割が難民問題の理解に益々重要となっています。

「誰一人取り残さない」SDGsの理念を実現させる上で、映画等を通じてこれらの人々や諸課題に思いを寄せ、具体的なアクションに結びつけることが、先進国にいる私達に強く求められているのではないのでしょうか。

昨年12月に、ジュネーブで「第2回グローバル難民フォーラム」が開催されました。4年に1度開

催されるこのフォーラムは、政府機関だけでなく、難民、市民社会の代表が一堂に会し、支援の取り組みやアプローチを共有する国際会議です。私自身も参加致しましたが、世の中が分断されている中、「社会全体で取り組む難民支援」がより一層重要となっているとの思いを強くいたしました。

昨年も、日本から多くの方々がUNHCRへ貴重なご寄付をお寄せくださいましたことに、厚く御礼申し上げます。UNHCRと当協会は、引き続き、紛争や迫害で故郷を追われた人々の命と尊厳を守るための活動に尽力してまいります。

最後になりますが、大丸有SDGs ACT5の益々のご発展を祈念致しますとともに、今後もSDGs目標

達成に向けて様々な取り組みをご一緒させていただきますと幸いです。



国連UNHCR協会
事務局長

川合 雅幸氏

Masayuki Kawai 東京大学法学部卒業。1986年三菱電機株式会社入社。35年間の在任中、人事、国際事業部門を中心に、英、仏、西、UAEにおいて計15年の海外勤務を経験。2017年から中東事務所長（ドバイ）。2021年7月同社退社、同年同月、国連UNHCR協会事務局長就任。

参加者からの声



森・里・川・海の 連携した取り組みとして

瀬戸内かきからアグリ推進協議会
全国農業協同組合連合会岡山県本部
農産・園芸部 専任部長

小原 久典氏

S USTABLE 2023 VOL.3「里山と里海をつなぐ循環型農業」では、JAグループ岡山をはじめ、岡山県内の自治体や企業・団体様等で進めている事業「瀬戸内かきからアグリ」をご紹介させていただきました。瀬戸内海で育てられた牡蠣の殻（＝カキ殻）を、有効利用する循環環境保全型事業です。当日は、招福楼 四代目主人 中村様に、カキ殻を肥料・飼料として利用した「里海米」「里海卵」を、素材そのものの味を引き立てたおいしい料理に仕立てて頂きました。

さて、岡山県における米の生産は、産地間競争の激化に伴う米価の下落、高齢化による担

い手不足、肥料農薬などの経費増高などにより、耕作放棄地が増加して県内の水田作付け面積は60年前の約1/3にまで減少して来ており、生産基盤の弱体化が急激に進んでいることが社会問題になりつつあります。

一方、瀬戸内海は環境保全措置法などの施行によって大変綺麗な海に生まれ変わりつつありますが、陸から流れ出る栄養塩の減少によって「貧栄養な痩せた海」ともいわれており、カキ殻の処理問題に加えて、瀬戸内海の水産資源枯渇という更なる大きな問題も抱えています。このことは、前項でも述べた、県内の水田面積が減少し耕作放棄地が増加したことが要因の一つであると考えられています。

今、私たち農業者が進めなければならないことは、この「瀬戸内かきからアグリ」の取り組みを全国の皆さんに知ってもらい、里海米を中心とした里海農畜産物のブランド化を進めることで、耕作放棄地をなくして豊かな里山、里地を作ることが里海再生にも繋がり、「持続可能な食の実現」の一助になると確信しています。

「瀬戸内かきからアグリ」は皆様方のご支援・ご協力によって確実に事業拡大が進んでいますが、当事業はカキ殻を有効利用して農畜産物の生産性を高めることだけが目的ではありません。森・里・川・海の連携した取り組みとして、漁業と農業、地域・企業・人をつなげ、岡山県内だけではなく、全国にこの取り組みを派生させて、全ての人々が「笑顔でつながる」持続可能な取り組みになることを目指していきたいと考えています。

私 たち一般社団法人プロギングジャパンは、ジョギングをしながらゴミを拾う新フィットネス「プロギング」の普及を目指す協会で、昨年に引き続き丸の内にて定期開催のイベントを行わせていただきました。

プロギングでは「社会貢献と言わない社会貢献」をテーマに掲げて活動しています。小学生からSDGsについて学ぶ昨今ではありますが、社会貢献というワードに堅苦しさを感じるにより、社会貢献活動への参加が遠のいてしまうという方も少なからずいます。そこでプロギングでは社会貢献や環境問題といった内容をあえて伝えず、参加者個人のお楽しみを前面に出すことによって興味がない方を巻き込む取り組みを進めています。そしてその結果、参加者の体と心は満たされ、いつの間にか街もきれいになる活動としています。

様々なプロギング企画の中でも、特にこの大丸有SDGs ACT5のプロギングでは“ツナガリ”を意

識したものをを行っています。ワーカーや観光客が入り乱れて多くの人が行き交う丸の内ですが、そこで新しい人に出会う機会は多くはないでしょう。プロギング企画が、そういった人々が体験を共にし繋がりが合う場所として、もしくは丸の内の新たな一面を知れ人と街が繋がりが合う場所として、機能していくことを目指しています。

インターネットの普及に伴い興味が無い分野に偶然出会う可能性が減ったとも言われています。そんな時代だからこそ人と人が偶然出会う場所が必要だと感じます。様々な想いを持った人が出会い、体験を共にすることによって新たな取り組みへと繋がり、そして街もきれいになる。大丸有SDGs ACT5参加者の皆様と共に、明るい未来づくりに協力させていただければと思っています。

この文章をお読みいただいた方も、どこかのプロギングイベントでお会いできることを楽しみにしています。



ジョギング×ごみ拾い 「プロギング」で、 人と人、人と街がツナガル

一般社団法人プロギングジャパン
会長

常田 英一朗氏

参加者からの声



ひとりひとりが主役！ 多様な人が活躍できる 「未来のアタリマエ」を目指して

西村あさひ法律事務所・外国法共同事業
ビジネスサポート部

上羽 朝子氏

※写真前列右端

西 村あさひは世界の20の拠点に多様なメンバーを擁し、日々「法の支配を礎とする豊かで公正な社会の実現」を目指している法律事務所です。ひとりひとりが自分らしくありのままでその能力を最大限に発揮しあい、お互いに影響を与えあえる環境が必須と考え、D&Iの推進に取り組んでいます。

その中で大事にしていることは、D&I推進は推進組織がやっていたらいいことではなく、事務所メンバーのひとりひとりが主役!ということです。もっと多くの人に自分が主役!と感じてもらえるようになるのに何か良い方法はないだろうか?と思い、2021年に創設されたE&Jラボに参加しました。D&I推進担当者向けのミニラボも含め、大丸有を中心にそれぞれの立場でD&I推進をしている方々からたくさんの刺激と学びをいただいています。

2023年11月に事務所が協賛させていただ

いた「E&Jフェス!」では「E&Jパレード」や「MAZEKOZEアート」ワークショップなど、以前参加していたE&Jラボで「自分たちで勝手にリミットをつけずにはまずは大きな夢をみよう!」と話しあったものが、なんと現実になっていました。

パレードに事務所の有志メンバーで参加し、私たちが目指す多様な人が活躍できる「未来のアタリマエ」に思いをはせながら大丸有エリアを歩きました。参加したメンバーからの言葉で嬉しかったのは、「楽しかった」という言葉です。まさに「D&Iの取り組みを一步進め、誰もがEnjoy & Join (E&J)でD&Iを推進する」機会となったと感じています。

D&I実現への決意を新たにするとともに、D&I推進の仲間がたくさんいるこの大丸有という街で働いている幸せを感じた大切な一日になりました。

このような貴重な場を与えてくださるACT5実行委員会の皆様に感謝しております。

下 田市は1975年のピーク時には31,000人の人口を擁していましたが、2023年には20,000人まで減少し商店街では空き店舗が目立つようになってきています。

私自身も地域課題解決プログラムなどを運営してきた中で、地域だけで地域課題解決するアイデアや動き出すきっかけを生み出すことの難しさを感じていた時に、SDGsを推奨している「大丸有SDGs ACT5」と繋がるきっかけがあり、今回、行政、地元の高校生、地域事業者、ワーケーションに来られている方々を巻き込み、地域の課題について様々な世代の方と取り組みを進めて参りました。

2023年7月から9月にかけて行われたプログラムでは、高校生が学業や部活動との調整を図りながら、地域の課題に積極的に取り組みました。この取り組みを通じて、高校生は協調性と柔軟性を養う重要な経験を得ると同時に、地域

社会における課題意識を高め、地域事業者と連携し協力体制を築きました。

特に、地方の学生の働き方の選択肢に焦点を当て、地域事業者との協力を通じて地元の魅力を発見する取り組みが、地域社会の活性化と学生たちの多様なキャリアパスへの展望を広げる一翼となりました。

プログラムを進める中で、高校生たちが自ら主体となり高校生カフェを開催し、地域との交流の場を創り出すアクションが生まれました。この自発的な取り組みにより、地域の方々との連携が生まれ、高校生がカフェを運営する過程で地域との交流の機会が増加しています。このプログラムから生まれた年代を超えて「無いものは自ら創り出す」という創造的な発想で、今後も継続的に地域の様々な方を巻き込み、ACT5と一緒にアクションをして行きたいと思っています。



無いものは自ら創り出す! 高校生と共に地元の魅力を発見し 地域の活性化へ

合同会社local is beat
代表

梅田 直樹氏

III 総括と次年度に向けて



大丸有SDGs ACT5実行委員会

大林 悟郎
事務局長



井上 成
運営委員長



狩野 卓真
事務局次長

「アフターコロナ元年」 リアル開催の充実と、人気コンテンツの確立が ACT5の自律的稼働を预言している

フルでリアル開催できた2023年の大丸有SDGs ACT5。2030年に向けて着実な手応えを得ることができた年となった。活動はより具体化し、「ポスト2030」も見えてきた1年。トークからは、パートナーシップで目指す領域がより明確になってきたACT5の今が垣間見えた。

大林 今年のACT5は、期間を通じてすべてリアル開催できた「アフターコロナ元年」というべき年となりました。人気コンテンツも確立してきており、いずれも盛況、満員。立ち上げから4年目を迎え、大丸有エリアを起点にした一定程度の浸透とパートナーが増えてきた手応えを感じると同時に、安定稼働に向けては課題も感じる1年となったのではないのでしょうか。ACT1ではサステナブルが定着化してきた中、農林中央金庫さんのパートナーにもご参加頂きましたね。

狩野 サステナブルは生産者は自らのサステナブルな

取組みをPRでき、消費者はサステナブルフードを学び・体験できる貴重な場だと思います。農林中央金庫からの紹介で登壇頂いた方々からも、とても好評です。

井上 そんなサステナブルフードがより浸透するためにはやはり消費者の変容が大事です。「良いものは高くても買う」という意識変容・行動変容を促すこと。それこそACT5の目指すところでもあります。

大林 ACT2の環境面では、古着を回収する「PASSTO」が、のべ10000名参加し2400kgを回収できたこと、濠プロジェクトなどで身近なところから生物多様性について

で考えることができたなど、着実な成果を挙げることができました。農林中央金庫さんからはJA援農支援隊のプログラムをご提供いただき、展開しました。

狩野 農業は労働力不足のなか、オフィスワーカーが農作業をお手伝いするというプログラムですが、大丸有の多くの方に興味を持って頂きました。支援に繋がるだけでなく、参加者自身のリフレッシュに繋がるメリットもあると感じました。

井上 テレワーク、二地域居住など働き方の文脈でも意義深い。今後、漁業などの手伝いもできるといいですね。入り口としては最適だったと思いますし、ぜひ継続していただきたいです。

大林 三菱地所もそうですが、どの企業も地域と連携している社会貢献活動があると思います。パートナー企業が増えてくると、そうした活動をACT5に開放し、提供しあうということもできるかもしれません。

井上 「ポスト2030」のキーワードの一つに地方との関係人口を増やしていくことが挙げられます。その意味でも企業が地方と関わって実践しているリソースをオープンにしていくことには価値があります。ACT5がそのような活動のプラットフォームにできたらいいなあ。

大林 ACT3では「伊豆下田プロジェクト」が進み、地域課題の持続可能な解消法を探索していきました。まさに課題解決に向けては二拠点居住なども一つのキーワードですね。

井上 地域課題に、大丸有のワーカーのケイパビリティ、知財を活かす取り組みですが、その社会実装の第一弾という位置づけです。23年は、キーとなる下田高校との提携に一步踏み出しました。今後は実装のあり方や可能性を検討するとともに、諸条件を精査しモデル化の可能性についても検討できればと考えています。

狩野 地方創生・地域活性化という課題は、農林水産業も抱える課題なので、農林中央金庫としても引続き取り組んでいきたいですね。

大林 ACT4では「E&Jフェス」を開催することができました。公道利用など色々ハードルの高かったパレードも実施できたことは、大きな一歩だったと思います。また、初の試みであるにも関わらず、企業単位の参加が多く、パートナーが大きく広がった点もACT4の大き



な成果となりました。

狩野 私も参加させてもらいましたが、熱量の高さ、そして皆さんの表情の明るさが印象でした。

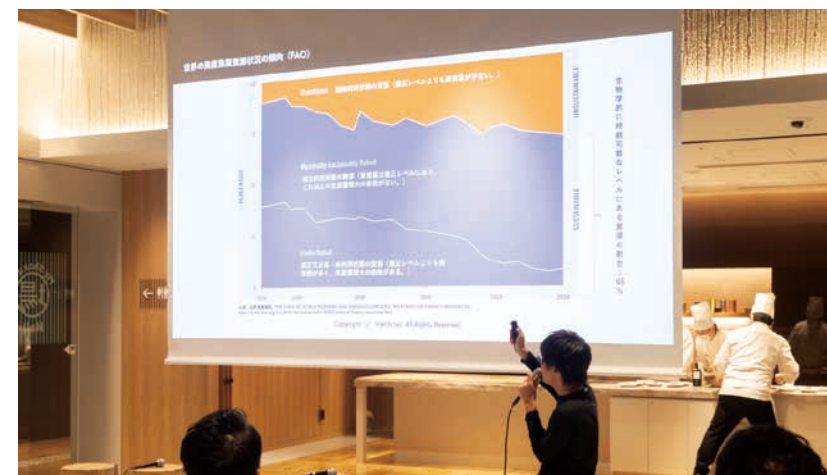
井上 企業にとってのダイバーシティは、経営の多角化という側面で語られますが、これからは企業の競争力の強化、持続的な経済的成長という面からしっかりと語る必要があるでしょう。逆に言えばまだまだD&Iは伸び代があるし、パートナー企業の増加はそれを物語っているのかもしれない。

大林 ACT5のSDGs映画祭では一般に認知されつつある社会課題の一步先に注目し、メッセージを発信することができました。初の全回満員御礼という嬉しい成果にも繋がりました。また、コミュニケーション関連では来年度、丸の内ポイントアプリへの機能統合も予定されており、これまで以上に多くの大丸有エリア就業者、来街者とのアクセスポイントになることにも期待したいですね。来年度に向けての課題やテーマはどうか。

井上 例えば下田では、より具体的な交渉を進め、具体的なアクションを起こしたいと考えているように、本当にいいよ実装フェーズに入っていくことを意識しなければなりません。そのためには、情報発信や認知拡大にも務めなければなりませんし、パートナー企業のさらなる増加も呼びかけたい。SDGsの達成の社会的意義のみならず、企業にとっての意義も、しっかりと伝えていきたいと思います。こうした活動の社会的なインパクトを定量的・定性的に可視化することも考えています。活動成果が蓄積されてきた今だからこそ成果を見える化することがパートナーの増加にも繋がると信じて取り組んでいきたいです。

アクション一覧

- ACT 1**
- アクション 1-1** サステナブルフードとのポイント連携
 - アクション 1-2** SUSTABLE2023～未来を変えるひとくち～
 - SUSTABLE2022 #1 食品ロスが生み出す新たな可能性 ～資源循環と経済の両立～
 - SUSTABLE2022 #2 プラントベースという選択肢 ～酪農による環境負荷を考える～
 - SUSTABLE2022 #3 里山と里海をつなぐ循環型農業 ～人と自然が共生するデザイン～
 - SUSTABLE2022 #4 海を修復するアサリ養殖 ～牡蠣殻を活用した環境再生～
 - SUSTABLE2022 #5 国際交流から学ぶ、持続可能な一次産業の未来 ～京丹後とブルターニュの事例～
 - アクション 1-3** 大丸有のプロ料理人向け“ジビエ料理セミナー”
- ACT 2**
- アクション 2-1** マイボトルを持って大丸有に行こう！
 - アクション 2-2** マイバッグを持って大丸有でお買い物をしよう！
 - アクション 2-3** お気に入りのジュエリーポーチ・ボックスで、限りある資源を大切にしよう
 - アクション 2-4** マイ箸・容器の持参と、おいしいランチでサステナブルに貢献しよう
 - アクション 2-5** マイお箸を持って、常盤橋タワーの“みそスープBAR”に行こう！！
 - アクション 2-6** 大丸有アパレル店舗での衣類回収に参加しよう！
 - アクション 2-7** 不要となった衣類とファッション雑貨を回収し、リユース&リサイクル「PASSTO」
 - アクション 2-8** 鞆類のケア・修理・回収 マザーハウスのトータルサービス「ソーシャルビンテージ」
 - アクション 2-9** 資源を大切にしよう。ニールズヤード レメディーズの空き容器回収
 - アクション 2-10** 資源を大切にしよう。コスメキッチンの空き容器回収「リサイクルキッチン」プログラム
 - アクション 2-11** 鞆類を大事に使い続けよう。ゼロハリバートンのリペアサービス
 - アクション 2-12** 衣類を大事に使い続けよう。バタゴニア衣類修理サービス
 - アクション 2-13** 衣類を大事に使い続けよう。ゴールドウインググループのリペアサービス
 - アクション 2-14** ショッパーから資源節約に貢献！ビームスで取り組むSDGs
 - アクション 2-15** ようこそ！丸の内いきものランドへ！
 - アクション 2-16** 丸ビル4階「Be Organic」でのお買い物で、ACT5メンバーポイントを獲得できます。
 - アクション 2-17** 丸ビル4階「Be Organic」の容器回収プログラムに参加して、ACT5メンバーポイントを獲得しよう。



アクション一覧

アクション 2-18 エコバッグの循環プロジェクト

アクション 2-19 ビームス 新丸の内で『WE RECYCLE(衣料品回収)』スタート!

アクション 2-20 「専門家の10年間」×「一般人300人の2か月間」～2つの目線で見えてきた丸の内のいきものたち～

アクション 2-21 いきもの好きな親子集まれ! いきもの観察会&カブトムシがつくる未来について学ぼう

アクション 2-22 皇居外苑濠での泥と生きもの採取 ～濠プロジェクト～

アクション 2-23 <リアル×オンライン>農業の衰退はSDGsにも影響?課題を学び、体験しよう ～セミナーのご案内～

アクション 2-24 <リアル>農業の衰退はSDGsにも影響?課題を学び、体験しよう

アクション 2-25 【企業向け生物多様性セミナー】『ネイチャーポジティブ』とは?企業が果たすべき役割

アクション 2-26 【企業向け生物多様性セミナー】TNFD v1.0が公開!生物多様性と金融との関わり、そして企業の目指すべき姿

アクション 2-27 <リアル×オンライン>“みらい”をつくる投資のリアル ～えらぶ時代に注目すべきESG投資とインパクト投資～

ACT 3

アクション 3-1 チャリティウォーキング

アクション 3-2 丸の内/仲通り周辺でのプロギング(ごみ拾い×ジョギング)～走って健康に、拾ってエコに～

アクション 3-3 下田MIRAIカレッジプロジェクト

アクション 3-4 オンラインまるのうち保健室

アクション 3-5 ハイブリットセミナー「MY PINK ACTION 知ろう、自分と乳がんのこと。」

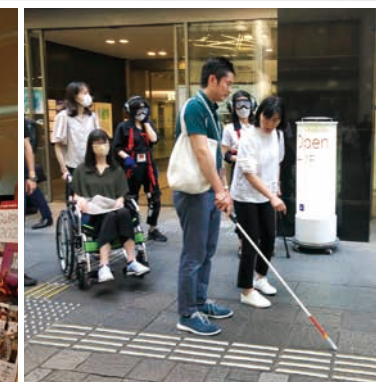
アクション 3-6 丸の内ラジオ体操

アクション 3-7 Minecraftカップ応援企画

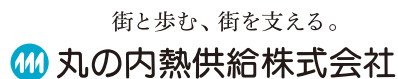
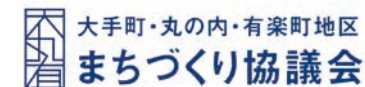


アクション一覧

ACT 4	アクション 4-1	女性の健康問題をケア / AMERICAN PHARMACY のフェムテック商品
	アクション 4-2	街あるきユニバーサルマナー研修
	アクション 4-3	Business for Marriage Equality 賛同企業交流会(東京会場)
	アクション 4-4	【PRIDE月間イベント】企業の社内事例とホンネを聞く!「ぶっちゃけLGBTQへの取り組み“ここ”に悩んでいます」
	アクション 4-5	丸の内 Shall We コンサート
	アクション 4-6	キラキラとアートコンクール マルキューブ審査会
	アクション 4-7	E&Jフェス! 集まれ 未来のアタリマエ D&Iをみんなで一歩前に進めるフェス
ACT 5	アクション 5-1	毎週配信されるESGジャーナルのNewsを読んでACT5メンバーポイントをゲットしよう!
	アクション 5-2	ACT5情報発信拠点へのチェックイン
	アクション 5-3	大丸有SDGs ACT5 × IDEAS FOR GOOD Museumブース出店 ～循環縁日 大人も子どもも楽しく資源循環を体験できる縁日～
	アクション 5-4	大丸有SDGs映画祭2023 映画祭①ポプという名の猫 映画祭②RBG 最強の85才 映画祭③イン・ザ・ハイツ 映画祭④ポバティー・インク 映画祭⑤グレート・グリーン・ウォール 映画祭⑥ミアとホワイトライオン 映画祭⑦ミート・ザ・フューチャー 映画祭⑧みんなの学校 映画祭⑨ミッション・ジョイ
	アクション 5-5	東京ビエンナーレ2023リンケージ つながりをつくる「Slow Art Collective Tokyo」



大丸有SDGs ACT5実行委員会



協賛パートナー (五十音順)



協力パートナー (五十音順)



後援：国連広報センター

制作：大丸有SDGs ACT5実行委員会 <https://act-5.jp/>

2024年2月発行